

瘦馬

中学校の英語教師をしている砂田先生は、株に熱中する他の教員と違い、情熱と正義感を持って教師をしていたが、ある日、校長から呼び出され不況のため学級整理に伴う辞職勧告を受ける。妻に打ち明けられず、幼い子を背に乗せ「パパは瘦馬 しっかりつかまれ」とおどけるが、目頭が熱くなった。

学生時代に小説家志望だった砂田は、小説家の道を歩むべきか悩むが、経済的不安と才能への自信のなさから決心できず、又、別の就職先も見出せずにいた。

校長夫人からの助言で砂田の辞職を知った妻 晴子は、夫の小説家志望を知っていたし、結婚時、自分のために断念したのではという負い目もあって、どうにかして小説家への道を歩ませようと励まし、どんな苦労も厭わないと説得するが、砂田は同じく辞職する若い同僚に職の紹介を頼む。

小説家になる決心をしてくれない夫に対し歯がゆさと憤りから、晴子は瘦馬と心で罵倒し涙をこぼすのだった。

これは昭和8年の作品であるが、当時の時代背景を知る傳田様をはじめ、皆様から多彩な意見が出ました。

芹沢先生の「好きな事を仕事として出来ないのは、努力が足りないからだ」という言葉から、趣味としてではなく小説一本で生活出来るよう努力するべきだ。又、男にとっての失業の恐怖は死刑にも等しく、芸術の厳しさ、自分の才能を知らばなかなか踏み出せない。離婚して自分一人の責任で書くべきだ。あるいは、どうしても書きたいなら余暇を利用してでも書いていたはず、砂田は才能がないのだ。子供のように、ただ好きだからだけではなく、選んだ職業には責任を持って努力するべき。等と、小説を書く姿勢が論題となり、他に職業を持たず、追いつめられた状態で書かなくては出来ないのではないか、という意見と、他に仕事があっても、書きたいなら書けるのでは、という意見が出た。

夫婦についても、妻がこんなに夫を嫌っては、もう上手くいかないのではないか。妻は夫思いで、芸術家の妻としては理想的だ。傷付いた夫をもっと思いやり自分の夢を背負わせて追いつめるようなことをしては、いつか夫にも嫌われてしまうだろう。等と意見が分かれた。

「パパは瘦せ馬、しっかりつかまれ」の部分に家族を守るという決意が見える。家族のためと言って自分が書けないことをごまかしている。等の意見もあった。

又、芹沢先生はこの頃、書けずに苦しんでいた時期であり、カギカッコの多さや行の使い方などからその苦労が伺える、という貴重な意見もあった。

先生ご自身の創作の苦労や主人公の芸術への想い、ままならない現実、妻の期待など、重荷を背負い苦しむ瘦馬に芸術家の過酷さを表していたのかも知れない。

当時の風俗について、作品に出てくるもらい湯から、当時のお風呂は楽しみ事で、薪の

節約の為、近所が別々の日に風呂を沸かし、それを友達皆で入った懐かしい思い出、又、学級整理に伴う辞職など、そんな強引なことは当時でもあり得ない事など教えて頂いた。

作品の中に、小説は教育上良くないとあるがそれは何故か。と言う質問に対し、その時代は、富国強兵、武の思想から小説は軟弱なものとされ、精神を軟弱にし墮落させるものとされた。又、勉強だけをしていれば良いとされた学生の勉強を妨げると認識されていたし、当時の作家の自墮落な生活がそれを裏付けていたようだ。と興味深い意見が出た。

瘦馬に重荷（身分不相応の意）瘦馬に鞭打つ（墮落の意）などことわざの紹介もあり、又、興味をひいた箇所を音読という司会者からの提案によって、それぞれの注目する箇所の違いなどが分かり、示唆深く賑わった会となった。